



Title	台湾人日本語学習者による日本語漢字語彙の習得 : 中国語母語話者における言語の知識と使用の観点から
Author(s)	郭, 毓芳
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59132
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【6】

氏 名	郭 毓 芳 (KUO, YU-FANG)
博士の専攻分野の名称	博 士 (言語文化学)
学 位 記 番 号	第 2 4 8 5 2 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 23 年 6 月 30 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学 位 論 文 名	台湾人日本語学習者による日本語漢字語彙の習得—中国語母語話者における言語の知識と使用の観点から—
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 西口 光一 (副査) 教 授 沖田 知子 准教授 小門 典夫

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、中国語母語話者による日本語漢字語彙の習得を日本語漢字語彙の使用と心理過程の変化からその習得の軌跡と経路を辿り、中国語母語話者における日本語漢字語の言語知識の変容に迫った研究である。

従来の研究においては、対照言語学の立場をとる言語転移の理論に基づいて中国語母語話者による日本語漢字語彙の習得を考察してきた。そうした研究では、中国語母語話者による日本語漢字語彙の習得を面的にしか捉えておらず、十分に習得の様相を捉えることができていない。本研究では、従来の先行研究の問題点を踏まえた上で、中国語母語話者である台湾人日本語学習者（以下、学習者とする）を調査対象として設定し、その日本語漢字語彙の習得を、学習者による言語知識の利用という観点から、流用、借用、熟達という新たな視点を導入することによって明らかにしようとした。

論文の構成として、第1章の序論では、本研究を行うに至った問題意識について述べ、そして、本研究の目的を示した。第2章では、研究の枠組について、先行研究の概観や問題点を、そして、転移を捉えるための新しい視点とその必要性について述べた。まず、中国語母語話者における日本語漢字語彙の習得研究に関する先行研究を概観すると共に、従来の言語転移の概念について検討した。そもそも転移は心理学の概念の1つであり、言語そのものに注目するのではなく、学習者の心理にこそ注目して当事者視点という観点からその現象を捉えるべきである。したがって、本研究では学習者による言語知識の利用の様相という観点から転移という概念を捉え直した。また、上述のように、本研究

は中国語母語話者による日本語漢字語彙習得の心理過程について検討することを目的とするものである。よって、ヴィゴツキー（2001）と西口（2011）に倣い、外国語の習得は母語の意味論に基礎を置いてなされるものであるという観点に基づいて検討を行った。第3章は、方法論の議論である。本研究は学習者がどのような言語知識に基づいて日本語漢字語彙を使用しているのかを考察するために、内省報告と内省報告の実施を可能にする用例作成課題という調査方法を用いて、学習者による日本語漢字語彙の使用からその習得の状況を考察した。第4章では、調査結果の概要を述べた。まず、調査対象者による用例作成の全体の調査結果を示した。そして、調査語の選定基準の枠組として用いる文化庁（1978）の分類SODNグループに基づいた調査結果を中心に示した。また最後に、学習者を中心にその調査結果を示した。第5章では、学習者における言語知識の利用とその変化を中心に、用例作成と内省報告の結果の分析を行った。第6章では、第5章の分析の結果を踏まえた上で、学習者による日本語漢字語彙の使用における心理過程とその変化を考察した。第7章は終章とし、7.1では、本研究の総括として、本研究の調査結果及び、日本語漢字語彙習得研究への示唆を論じた。そして7.2では、本研究で残された課題を提示した。

以下、本論文の結果の概要を述べる。まず、学習者における日本語漢字語彙の習得に関して、習得が困難な調査語、退歩した調査語、進歩した調査語、習得が容易な調査語という4つの習得パターンを見出すことができた。その次に、学習者における日本語漢字語彙習得の言語知識の利用が12類型の型に分けられることが分かった。単一言語知識の利用に基づいた従来の中国語母語話者による日本語漢字語彙習得研究とは異なり、本研究の研究結果から、学習者における日本語漢字語彙の使用は多重言語知識の利用に基づいたものがむしろ基本であり、単一言語知識の利用による日本語漢字語彙の使用はその多重言語知識の利用に含まれているものであることが分かった。その中で、中国語の同形語の言語知識と言語経験を通じて身に付けた調査語の言語知識が共に利用される結果が観察された。つまり、1つの時点における日本語漢字語彙の言語知識の認識は一通りのみではなく、学習者が多重言語知識を動員することによって日本語の漢字語彙の言語知識を認識して形成していくことが示唆された。この結果から、従来の研究は、多重言語知識の動員による学習者の日本語漢字語彙習得の現象を単一化して見る傾向にあったことが分かる。また、時間の変化という要因の影響の下で学習者における日本語漢字語彙の言語知識の利用が変化していくことが観察された。そして、調査語の中、中国語の同形語との意味対応において同じグループに属する調査語であっても、それぞれの調査語によってその言語知識の利用の様相が異なることが明らかになった。

また、本研究は学習者による言語知識の利用と心理過程との関わりというアプローチに依拠して研究を行っているが、このような新しい調査方法を提示することによって学習者の心理過程（言語知識の利用）を解明することの有用性を示した。従来の調査方法である文法性判断テストは、調査者が予測した用例が問題項目として用意されているため、調査対象者における日本語漢字語彙の習得状況は強制的な環境のもとで検討される。さらに、文法性判断テストという調査方法による表面的な解釈はかなり危険であるということ、そして学習者が何を基準に選択肢を選んだかについて不明な部分が多いということが問題点として指摘されている。これに対し、本研究では、自由連想による用例作成課題という調査方法を採用することで、学習者の日本語漢字語彙の言語知識を開示し、従来の問題点を解消した。この調査方法を通して、学習者における日本語漢字語彙の言語知識をより現実 に即した形で把握することができた。

次に、本研究は学習者中心（学習者主体）という観点から、日本語漢字語彙の習得を考察した。本

論文で議論した通り、転移は心理学の概念の1つであり、学習者の心理に注目するという新しい観点を提示することによって初めて学習者がどのような言語知識を利用して新しい言葉を学習するのかを明らかにすることができる。本研究の調査結果から、中国語母語話者における日本語漢字語彙の習得はほぼすべての学習プロセスにおいて、流用という心理過程を経ているということが明らかになった。しかし、日本語漢字語彙の習得に至るには、流用という心理過程の働きによって形成される言語知識のみでは十分ではない。したがって、学習者による日本語漢字語彙習得を進めるためには、調査語と接する言語経験を通じて該当の調査語の言語知識を身に付けることが必要となる。このように、本研究では、転移の中の流用という概念を取り上げることを通じて漢字系学習者である中国語母語話者における日本語漢字語彙の学習（習得）の特徴を明らかにすることができた。このことから、中国語母語話者による日本語漢字語彙の習得研究においては流用という概念を基礎として検討することで、中国語母語話者における日本語漢字語彙の言語知識利用の様相をより詳細に解明することができると主張する。

論文審査の結果の要旨

中国語母語話者による日本語の漢字・漢字語の習得については、これまでは、学習者の誤用の収集とその解釈、及び、対照研究に基づく両言語の類似点と相違点の資料を基に作成された漢字語彙テストによる学習困難点の確認に止まっていた。このような従来の研究に対し、本論文は、言語知識の形成を、第一言語の言語知識を基礎とした第二言語知識の形成と当該の言語要素をめぐる第二言語活動経験の堆積という2つの側面から動的に捉え、その時系列的な変容を縦断的なデータに基づいて検証することにより、従来の静的な転移概念を克服した形で中国語母語話者による日本語の漢字・漢字語習得の様相を明らかにした独創的な研究である。

調査語としては対照言語学的な観点から見てさまざまなタイプに属する23語が選ばれ、その23の調査語について日本に滞在している中上級の中国語母語日本語学習者8名を調査協力者として、約9か月にわたり2か月の間隔を置きながら各協力者に対し4回ないし5回の調査を実施した。調査方法としては、各調査時にすべての調査語について自由な想起に基づく用例作成を要求し、用例作成課題終了後にそれぞれの用例についてどのようにその用例を作成したかについて内省報告を求めた。そして、そうして得られた3752の用例とそれぞれについての内省報告をデータとして詳細に分析した。その結果、中国語母語話者による日本語漢字・漢字語の習得については、一部の例外を除いて調査協力者間で習得進行の傾向が類似していることが確認された。そして、漢字・漢字語習得の様相については、(1) これまでの対照研究に基づく研究で暗黙に想定されていた単一言語知識の利用によっては説明することはできず、自然環境での実際の言語活動経験からの用語法の直接的な適用を含む多重的な言語知識の形成過程がむしろ基本であること、(2) 従来想定されていた習得初期の単一言語知識はそのような多重的な言語知識の形成過程の一部に含まれていること、などが明らかにされた。

このように、本論文はこれまでの研究方法の課題を克服する新たな観点と研究方法により中国語母語話者による日本語漢字・漢字語習得の研究に新たな地平を切り拓き、上記のような諸点を明らかにしたという点で、高く評価することができる。調査協力者による内省報告が一部表面的なものになっていること、漢字・漢字語習得という現象全体の中で意味的な側面の習得に加えて漢字語の品詞やコロケーションの習得についてその位置づけや今後の研究の展望が明確に示されていないことなど、本研究テーマをめぐってさらに検討と検証を期待したい点はあるが、それらは本論文の価値を損なうものではない。

以上のように、本論文は当該分野の研究に重要な寄与をなし得る優れた研究であると考えられ、審査委員会は、本論文を博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。